



## 【本日身体測定・スポーツテスト】

「何のために」 「身体測定」や「スポーツテスト」って、何のために行うのでしょうか。「毎年のことだから」と済ませるのでなく、その意味について考えてみませんか。

自分自身を見つめるということが、将来を考える第一歩であるとするなら、今日一日は自分の「からだ」について見つめる一日。「からだ」は全ての資本です。素敵な仲間と出会い、その仲間達とともに夢に向かって努力する学校まで、あなたの心を運んでくれるあなたの「からだ」。そんな「からだ」をしっかりとみつめてみましょう！



### 「何もできずに生まれてくる人間」

生まれただけの自分の写真を見たことありますか？みんな、小さくて、かわいらしかったことと思います。最初は、3000gの赤ちゃん。食事もできないし、自分一人ではお尻も拭けない。牛や馬の赤ちゃんと違って、生まれてすぐには、立ち上がることもすらできない。そんな君たちは、わずか15、6年で、これだけ背が伸び（身長）、重くなり（体重）、足が伸び、それ以上に胴（座高）が伸びたのです。これだけ、走り、跳び、投げることができるようになったのですから、これは奇跡です。



その奇跡は、あなた一人だけが作り出した奇跡ではありません。誰がここまで大きく育ててくれたのでしょうか？今日は、この世に生を受け、ここまで成長してきたことに感謝する日です。ここまで、育ててくれたいろいろな人に感謝する日でもあるのです。

そう考えれば、ほら、今日も一日、とっての意味のある一日に思えてきたでしょう。なんか一生懸命生きようっていう気になってきたでしょう。

### 「最初の一人（ある学校のスポーツテストで）」

1学年主任をしていた年のスポーツテストで、忘れられない場面に出会いました。

男子は1500m、女子は1000mの持久走。最初に走った男子の最後の走者が走り終わった時、自然と拍手が湧き起こったのです。男子のそんなシーンがあったからでしょう、その後、走った女子でも最後の走者がゴールした瞬間、拍手が起こりました。運動会などではよく見かけるシーンですが、スポーツテストで……。みんなしんどくて、それどころじゃないはずなのに。



それは、仲間の一生懸命さに対する拍手であり、努力を讃える拍手でした。仲間の努力を素直に讃えることができる美しい拍手でした。

「自然と湧き起こった」と書きましたが、正確に言えば、自然に広がっていったのであって、誰か、最初に拍手をした人がいたはずで、その最初の一人が、最後まで一生懸命に走る仲間の姿を見て、感動し、拍手をし始めた。その時はよそを向いていた人もいたでしょう。しかし、そのたった一人の拍手の音に、周りの誰かが気づき、その意味に気がつき、拍手をしはじめた。その数人の拍手が大きな波となって、集団全員に広がっていったのでしょう。

最初に拍手をしたその最初の一人って素晴らしいと思いませんか？もちろん、その拍手に敏感に反応した他の生徒も素晴らしいのですが……。こんなことが自然にできる、自然な振る舞いとしてできる人間になりたいと思いませんか。

その学年は、「お互いが競い合いながらも助け合い、支え合う、そんな学年」に成長していきました。



本校に赴任して一ヶ月。この間、みなさんの素晴らしさにふれるたくさんの機会がありました。先日実施した歴史講演会もそのうちの一つです。

講演を聴くみなさんの態度はもちろんのこと、後日提出してもらったメモ用紙、感想用紙には感心しました。

今回の講演会では、「しっかりとメモを取りながら聴く」ことも「ねらい」の一つでした。なぜなら、社会に出ると、学校の授業のようにポイントを板書してくれたり、授業の流れが一目でわかるように、わかりやすく板書をしてくれたりすることなどほとんどありません。一人ひとりが、話の中から、重要だと思った言葉を拾い出し、メモし、そのメモを元に復元していく力が必要になるからです。

この習慣がちゃんと身に付いている人と、そうでない人では、同じ話を聞いても、成長のスピードが違ってきます。

そのねらい、期待に応えてくれた人を“Good Job”として紹介します。このほかにも、たくさんの生徒がしっかりとメモしてくれていました。全員紹介できなくてごめんなさい。

桜の季節の終わりに～最後に見た桜の樹～

不沈艦と呼ばれた戦艦大和が、徳山沖を出港し、乗組員 3000 人とともに東シナ海に沈没したのは 1945 年 4 月 7 日。元乗組員の八杉康夫さんという人の体験を聞き書きした「運命の 4 月 7 日 艦大和が沈んだ日」という本では、出港する大和の艦上の様子が描かれている。

ある若い見張役の水兵が双眼鏡で陸地の方を見ていた。その双眼鏡で桜の樹を見つけた彼は、思わずつぶやいた。「あっ桜だ」。すると、若者達が集まり、双眼鏡を奪い合うようにしそれぞれが桜を見つめた。口々に、「桜だ、桜だ」と叫びながら……

沖縄への片道の燃料しか持たずに出撃した大和に乗った若者達は、最後に見る日本の桜をどんな思いで見つめたのだろうか。そして、きっと見ることが最後になるだろう、故郷の桜は、彼らに何を語りかけのだろうか。

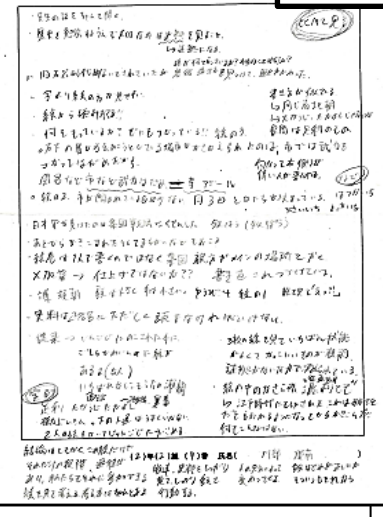
余程のことがない限り、僕たちの周りには来年また春がやってくる。再来年も春がやってくる。そして、その次の年も、桜の木もその年ごとに、忘れずに花をつけ、私たちの目を楽しませてくれるだろう。その幸せをかみしめたい。

駆逐艦「雪風」に救助され、九死に一生を得た八杉さんは翌日、長崎県の佐世保に無事たどり着いた。その時の様子が次のように記されている。「岸に咲いた桜の花びらが港に入るぼくたちの頭の上に降り注いだ」

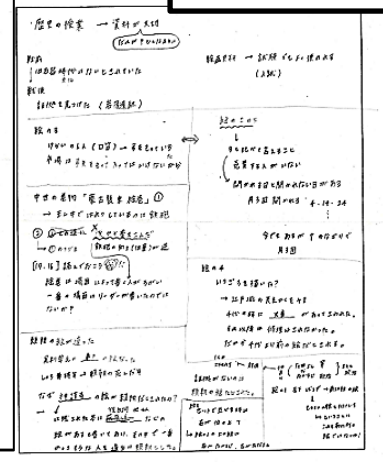
離任式が行われた。出会いとともに、別れの場面も美しい。最期の言葉は、やはり美しい。なぜなら、それまで積み重ねてき日々と思いながすべてその言葉に集約されるからだ。先に紹介した大和の若き乗組員、若き特攻隊員は、その最期の瞬間、何をつぶやいたのか。家族に、恋人にどんな言葉を残したのだろうか。散りゆく桜の花びら。その最期の一枚を観てみたい。どんな散り方をするのだろうか。きっと渾身の力と心を込めた美しい散り方に違いない。



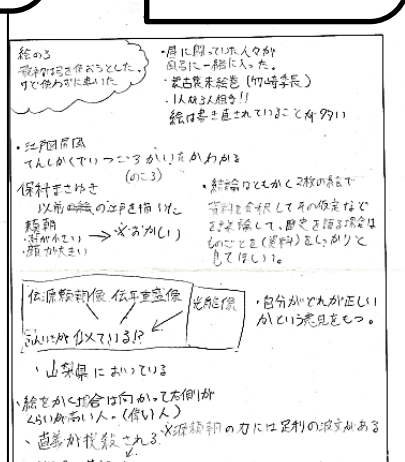
2年2組川部さん



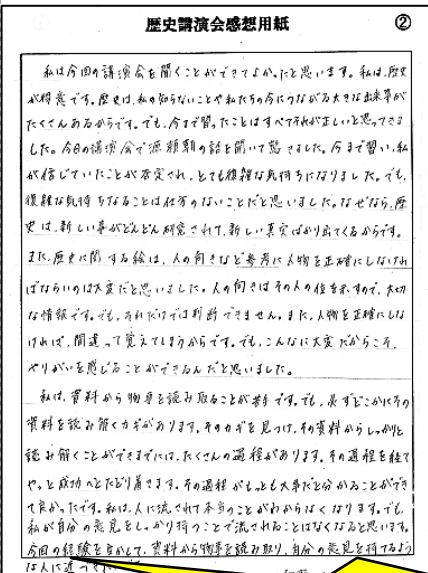
2年2組林さん



3年1組濱村君



1年2組向野さん



2年1組西村さん

